



目 次

宗教撰擇の基準……………	本多日生
立正大師の功勳……………	本多日生
日什大正師略傳……………	竹内日照
西郷翁と日蓮聖人……………	塚本松之助
聖訓摘要……………	本多日生
知法思國會の懇談會……………	……………

四月發行 本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

# 日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢  
五二八頁  
【送料十二錢】

## 目次 (總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 一、信仰修養思想と立正大師
- 一、教育勅語の解釋と應用
- 一、思想の基準

## (信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 一、信心と正憶念
- 一、菩薩行

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

## (修養の部)

- 一、新時代の婦人の修養
- 一、佛教の六善事
- 一、日蓮聖人の人格

## (思想の部)

- 一、國と入と教
- 一、東洋思想の大共通點

以上

## 宗教撰擇の基準

- 一、緒言 二、知識上の考察 三、道德上の考察 四、宗教上の考察
- 五、人身觀よりの考察 六、人生觀よりの考察

本多日生

## 一、緒言

先般文部大臣の主權に依つて宗教家招待會が開かれたが、自分も招かれた一人であつて、その席上宗教と教育の關係、又宗教の立場よりする思想の善導に就て多くの人の意見も語り合つた譯であるが、その際に文部當局の語は、最早や宗教の必要に就ては吾々に於ても確認して居る、随つて又我が國の教育方針に就ても根本よりこれを改善する必要に達して居るのであるから、何等かの具體案を製作して必ず實現の日は近きに在るといふことを公約されて居つた次第である。どの程度にそれが實現されるかは未

知の問題であるけれども、意見としては最早や宗教の價值並に必要といふ事は先づ徹底して理解せられたこと、信するのである。

その後神戸の方に參つた所が、教育家の法華經研究會の主權の下に大講演會があつた。これは教育家が法華經を研究するために會合さるゝので、未だ日は浅いのであるけれども、既に自分のみ研究を志にするに忍びない、廣く一般世人に法華經の價值を知らしめたいといふ觀念の下に講演會が開催せられたのである。その時京都大學の青柳博士が出席せられて、宗教の必要價值に關していろいろ科學的の方面からの立證があつて、誠に愉快な有益な講演で

あつたが、その散會後多くの教育者の集りて、どうしても教育に宗教味を取り入れなければならんが、どういふ方法にするがよいかといふ話が出て、黙禱式を用ひたらどうだらうといふことが、多数の一致した意見であつた。黙禱式といふのは學校の教場に入つて授業にかゝる前に、先生も生徒も黙つて一分間ぐらゐ頭を下げて、各々自分の「有難い」と思つて居る所に敬虔の心を捧げる、斯ういふ事は、その信仰の内容がいろいろ違つて居つても、黙つて頭を下げて居るだけであるから、差支なく行はれるであらうといふことであつた。恐くは他日我が國の教育界なり或はその他の修養の會合などに於て、汎く行はれるのは、先づこの形であるかと思ふ、それは最も實行し易いことで、さうして頗る有効なことであると思ふ。

前年長崎の造船所に於て信順會なるものが組織せられ、宗教の異同を問はないで心ある人が入會をし、事の有る秋だけ出て行つて騒ぎ散らかすといふのでは、各員の向上を促がす點に於て缺る所があると思ふ、何等かの方法を以て會員を改善して行くやうにしたいが、どうしたものだらうといふ協議を受けたので、それはやはり宗教の信念を與ふるが宜しい、信順會のやうな組織に依つて、彼岸ぐらゐに會員が集つて、何處か大きな寺で法要を営み、又先祖の追善とか、自分の關係があつて殺したりした人間もあるだらうから、それ等の追善を營むといふことにして、宗教信念と接觸せしむることが宜からう、會の名前もやはり信順會として、それを始終心に離さんやうに、又信心の氣分に進んで居る者は尙更ら朝起きて顔を洗つた時には、何れも合掌禮拜をするやうにしたら宜からうといふことで、その會が出来た。今では餘程澤山な會員になつて居るやうである、大阪、奈良、京都、滋賀、和歌山の五府縣に亘つて會員の大募集をやつて、今日はその會が基

て、今申す黙禱を實行したのである、工場に入つて作業にかゝる前に整列をして、約一分間黙禱をする又休暇の日などは別に會合して修養會などを開く時には、必ず黙禱をやるといふことであつたが、非常に効果が宜かつた。その時主に世話をして居つた技師の堀といふ人は、基督教徒であつたけれども、頑迷固陋な考は有たない人であつたから、能く佛教徒などとも協力して、吾々と共に黙禱式をやつたこともある。

その後大阪の國粹會の中から大西武三といふ人が分離して、やはり信順會といふものを組織した。これに就ては自分が指導を與へたのであるが、大西君の言ふには、國粹會は何か國家の御用を勤めるといふ考の下に出来た會で、それは善い考であると思ふけれども、併し平素の修養訓練が何もないから、やはり習慣となつて居る所の荒らいた氣風とか、粗暴な態度といふものが改まらないで、どうも面白いになつて、いろいろ有益な事業を計畫して、朝鮮人の世話などを相當手廣くその會が行つて居るやうである。その他火災があるとか、天災があるとかいふやうな時には、身を挺して難に當るといふやうな、大分奉仕的の仕事が出来て居るやうに思ふ。左様な譯で、宗教心に關する事柄は、文部省でも又労働者でも、或は俠客と言はれるやうな人々でも皆今日は自覺して參つて居る譯である。それ故に上下を通じて宗教の必要といふことに就ては、最早や反對論は兎を脱いだと申して宜からうと思ふのである。

その宗教の價値なり必要なりの事は、屬々申述べて居ることであるから今は略するが、要するにそれが人格の本となり、それが人間の善良なる活動の基となり、それに依つて社會國家が組立てられ、ば、理想的の進歩を促して行く譯である。信念の有る人は自ら教はれるのみでなく、人を救ふ力を現はして

来る、信仰の力に生くる時、はじめて精神が活々する、精神が活々する時身体までが活躍をして、細胞組織、血球までが非常な旺盛な勢になつて来るのであるから、信仰は一つであるけれども、精神の全能力が活動を起し、それから身体に及んで生理的にも非常な爽快な気分を齎し来る。斯くして信仰より導いた活躍といふものは、非常に大きなものになつて行くのである。人間が信仰を失へば不良となり、不愉快となり、行詰りを生じて来るから、頭腦がいつもモヤ／＼して居る爲めに、精神能力が活躍しない身体もそれが爲めにグンナリしてしまふ。

その事は生理的に試験してもわかることで、宗教信念に生きて居る人の血球は非常な活躍性を有つて居る、丁度日本の忠良なる國民が君國の爲めに生命を捨て、働かうとする、忠勇義烈の状態に居るのである。それが宗教心を失つて居る人の血球といふものは、丁度或國の人民見たやうに中心がないから、

ぬやうな活躍をする、屋根の上から飛んで逃げたり活動寫真でやるやうに兇悪な奴は非常な活躍をするそれならばサウいふ人間を善い方に向はしたならばどうかといふと、少しの仕事を命じて「イヤ身体が倦怠い」とか「何處が痛い」とか言ひ出す。

左様にして宗教の信仰といふものは、それが精神および身体の活動の上に及ばず影響は實に多大なものである。そこで一人に取つても社會に取つても、宗教心の興廢存亡がその人の生涯を支配し、社會を支配するといふことが起つて来るのである。新らしいがりの者が労働運動などで跳ね廻つて居つても、宗教の價値を知らずに唯だパン／＼といふやうなことを言つて居れば、それは舊い人達であつて、今や文化の程度は宗教の必要を確認するに至つたのである。

そこでそれはモウ動かすべからざる事として、更に一段進んで、左様に宗教の價値必要を認識した以上は、教育の上に、又國家施設の各般の上にこれが

金が無くなれば掠奪をする、金が有れば飲み食ひをして、あとは阿片に中られて中氣やみのやうになつて居る。さうして何か悪い事でもしようといふ時には、ピンとするけれども、善い事には少しも熱がない、掠奪とか破壊的行動とかいふやうな時だけは眠たいやうな顔をして居る。これは一般の上に非常に明瞭になつて居る事である、今日の不良少年ナンといふ者はみなさうである、悪い事にはバツと元氣が出る、「これから火を放けに行かうぢやないか」といふ時には皆が元氣を出して「ワーク」と活躍するけれども、何か善い事をしようとしても言つたならば、「俺は今夜は腹が痛い」とか「俺は用事がある」とか言つて、少しも熱心にならぬ、善い對つては非常な倦怠氣分が起り、惡に對しては勇猛なる活躍を起す。泥棒や殺人をするやうな者は皆その通りで、人を殺して逃げ歩くやうな時分には、健康な者も及ば

迎へられる時、宗教はそれ／＼物興して參るのであるが、その宗教が勃興する場合に宗教の内に毒素が在るといふと、それが又異つた方面の害毒を社會に及ぼして来る譯である。それ故に復活といふ時には必ず刷新が伴はなければならぬので、復活に向ふ時に必ず改善がなければならぬ。王政復古と言つたならば即ち開國進取といふことになる、明治の維新は王政復古であるが、併しそれが日本の新文明を開拓したことになるのであるから、その如くに宗教が復興すると言つたならば、宗教は同時に大刷新をせられなければならないものである。唯だ復活を言うて刷新を忘れ、「何でも構はぬ、古いお寺でも古い社でも、どんな教義でも構はぬ、宗教は皆盛んにするが宜い」、「斯ういふボンクラな頭腦もあるけれども、それは又常識の缺けたものと言はなければならぬ。物の復活せんとするや必ず刷新されなければならぬものである、それといふものは一時そのものが廢れた

といふのは、やはり廢るべき原因があるので、棄る者ばかりが悪いのではない、そこに棄てらるべき缺點もあつた譯ナンである。だから今度復興して來るのは、その善良い方の側を觀て復興するのであるから、先に棄てられる時に伴つて居つた悪い影は斬つて捨て、健全なるものにして復活を圖るのは當然の事である。

その場合に我國の國民一般が、果して宗教撰擇の正しき基準を有つて居るかといふことは、今日疑ひなき能はずで、どうも此の儘で行つたならば、宗教復活について新たな害毒を他日國家社會に發生するのではなからうかと杞憂する次第である。そこで「宗教撰擇の基準」と題して、宗教を撰ぶ定規となるものは如何なるものであるかといふことを申述べようと思ふ。

今日は宗教學といふものが段々發達して、斯ういふ問題を研究すべき材料は相當に蒐つて居る。又佛

教は西洋人が宗教學と稱して研究して居るよりも、ヨリ以上の豊富な材料を佛敎一つが有つて居るのである、あらゆる世界の宗教全部を研究したよりも、佛敎一つを研究した方が寧ろ豊富であるかも知れない、それ程佛敎は廣大な宗教である。そこで今日の宗教學の方に於て言うて居ること、佛敎が教へて居る事を兩々相照して考へるならば、茲に相當正しい基準が現はれるのである、それは自分としては恐らく間違ひない基準だといふ信念に立つことが出來のである。

## 二、知識上の考察

第一は知識上の考察として、先づ一般に知れ亘つて居る宗教の弊害は所謂迷信である、迷信とは病氣の事、商賣の事、その他人事上の事に關して下らな

いことに拘泥して、それを宗教の信仰だと考へて居る事である。神水を飲めば病氣が癒るとか、護摩を

當その被害は甚しいものがある。左様な事は何も宗教の問題といふ程ではないのであつて、人間の常識の問題である。

禁けば罪が消えるとかいふやうな形式的の事柄、愚な事が宗教には澤山伴うて居るのである。小學校の教科書で迷信を警めたのは、それは無理からぬことであつて、例へば天理教が神前に神を供へて、その花瓶の中に鰯を入れて置いて、「お前が今ここで神様に祈つて、若しこの鰯が動いたならば神意に適つたのだから病氣が癒る、鰯が動かなくなつたら御利益がないのだ」といふ、長い間そこに祈つて居る間に、花瓶の中の鰯が動けば鰯が動くに極つて居る、それを以て「サア感應があつた」といふやうな事をやつたこともあつたと云ふ。左様な鰯がはねて鰯が動くといふやうなことで病氣が癒るなどと思ひ込んで、そんな事に引摺られて居る場合が餘程澤山ある。宗教の衣を着て左様な人を迷はす一種の罪惡を犯すやうな惡漢も、澤山宗教の中には入つて居る。それは罪が犯し易い、表面は綺麗にして親切らしくやつて居るから警察も直ぐには手を入れられないので、相

所が今日の世の中には段々さういふ悪い者が殖えて來た、昔もさういふ者はあつたけれども、今日は餘程巧妙に人を騙す方法として宗教を利用して居る者がある。そんな所に引つかつて行くといふことは知識上の考察として第一に考へなければならぬことであるが、その知識といふのは常識上の問題である、謂はゞ愚かな者が引つかゝる譯である。所がその愚かな者が割に澤山居るのである、信仰上に就ては一向經驗知識がないものであるから、亭主は法學士、妻君は女子大學を卒業したといふやうな人が左様な迷信に瞞されて居るといふことが幾らもあるそれ等はモウ少し宗教の知識を常識として心得なければならぬのである。

宗教には無論神祕的の御利益はある譯で、病氣が

信仰から感應を受けて癒るといふこともない譯ではないけれども、それは人間の心理状態といふ事を餘程公正に考へなければならぬ、そこが素人にちよつと分りにくい所である。尤もその公正といふ事は要するに程度の問題になつて来るので、宗教學に於てはこれを人間の体温に譬へて説明して居る。人間の身体には熱といふものがある、併しその熱が三十六度とか三十六度五分といふことであれば、これは平熱であつて差支ないのである、それが三十八度となり四十度になれば、熱病だといふことになる。又これが三十三度とか三十二度になつても熱が低く過ぎる、やはり病氣である。人間の体温にはその平熱といふものがある、宗教がサウイふ神秘的の感應といふことを考へるのも、その平熱的の信仰でありさへすれば、それは迷信でないけれども、無闇やたらに御利益といふものを信じて、何んでもかんでも御祈願さへすれば病氣が癒ると言つて、朝から晩までガ

ことは人間を精神病者にする、或はそれを幫助けるものである。それを御祈禱だなどと思ふて居るのは無教育の愚か者がやることで、今日心理學なり宗教學なり、その他人文の知識が進んだなれば、あんな馬鹿なことが行はれるものではない。それを有難く思つて御利益だと迷信して居る、そんな所に行かなければ病氣にはならないのだけれども、無闇に「狐が憑いて居る、狸が憑いて居る」と言はれるから、本人も「サクカナ」と思つて、終ひには狐が出て来る譯である、左様な事は今日の教育の上に於ては認められることは出来ない。

その他病氣が精神的の關係に依つて癒ることもあられるけれども、併し身体を構成して居る大部分は、生理的作用に屬するものである。やはり人間は食物を攝つて身体を支へて居るので、どんなに精神が確かりして居るからと言つても、飯も食はず、水も飲まずに生きては居れない、この生理作用といふもの

チャー／＼やつて、狐が悪いとか狸が悪いとかいふア、いふ行方は、熱が昇り過ぎたといふことになり、それが先づ迷信である。現に中山の法華經寺あたりでやつて居るやうな、所謂祈禱式といふものは行る方の人は正しいやうに思ふて居るけれども、ここには多大な迷信と罪惡とが混入して居るのである。この頃警察の手が入つて嚴重な取締をするといふ事であるが、宜しくア、いふものは徹底的に矯正すべきである。モウ少し強く言へば、アノ宗旨の管長なり寺の責任者なりは、相當の責任を負ふべきものである、ア、いふ事を默認して置くといふ法はない人に迷ひを起させるものである。無闇に「お前は狐が悪い」といふやうなことを言へば、人間の性格といふものは段々悪くなつてしまふ、一種の暗示をかけられるのであるから、サウ迷信することに依つて人間の人格が分裂を始め、本當に「自分は狐が悪い」と思ひ込んでしまふやうになる、ア、いふ

が精神に關係はあるけれども、併し精神のみに於て人は生きて居るものではない。人間はパンのみにて生くべからずといふ事も眞理であるけれども、亦精神のみで生きることも出来ない、それが出来れば仙人みたいなものだけれども、さういふ事は出来ない話である。どうしても人間は物質の關係から生理的作用に依つて食物を攝つて、胃囊が消化してその榮養を吸収して生きて居るのである。少しも榮養分のない土みたいな物ばかり喰つて居つたら死ぬに決つて居る。それは生理學の知識、衛生學の知識に依つて、人間の身体の組織がどういふものかといふことが分つて居る。永く風呂に入らなければ汗垢が出る、風呂に入つて「汗知らず」を塗つて置けば汗垢が出来ないといふやうなこともある、それを何でも信心で済ますと言つて、汗をかいても拭きもしないで「南無妙法蓮華經」といふやうな詰らないことをやつてはいかん。生理的の事は生理的の常識に依

つてやつて行かなければならぬ。

併し精神の關係が随分多大に身体に影響を及ぼすから、大抵のことは精神で癒る。だからサウ病氣を苦にすることもない、一々病氣を苦しめて「サア醫師だ」「藥だ」といふと病氣の方で増長するから「ナニこの位な病氣は何でもない」といふ元氣は人間になければならぬ、それは何も宗教でなくとも、人間一人前としてその位のことには有つて居らなければならぬ。ちよつと考へたら分ることである、「オ、寒い〜」と思つたら直ぐ感冒をひく、「ナニ糞ッ」と構へて居れば感冒もひかない、風呂に入浴つても直ぐ「熱い〜」と言はないで、「ナニこの位大丈夫だ」と思へば我慢の出來ぬことはない。左様に人間の精神力は貴いものであるから、そんなにクヨクヨして、この水を呑んだら腹が痛くなりはせぬか、これを食べたら病氣に罹りはせぬか：一々心配して居たら人間は弱くなつてしまふ。であるから一

通り衛生の心得はして、あとは信仰に委せて安心して日常生活をして行くといふやうな所はなくてはならぬ、病氣に關しても正當な觀念、所謂三十六度五分の平熱の信仰で吾々が保護されるといふことは宜しい、それが度を越すとといふことは慎しまなければならぬ。

その程度はナカ〜難かしいことであるが、併し本氣で研究すればわかることである、それは昔から偉い人が皆言うて居ることで、所謂感應ありとは信するけれども、併し終日禱つて終日感應なしと雖も何も怨む所はないと古人も言つて居る。日蓮聖人のお言葉にも

「天も捨てたまへ、諸難にも遣へ、身命を期とせん」

「現世の安穩ならざることを歎かざれ。」

とまで言はれて、信念の前には諸天善神も守つて下れるやうに……さういふ無理な註文を持たむから當が外れる。斯ういふ面では美人が嫁に来て呉れないのも御尤でござるといふ風に、やはり合理的に考へなければならぬ。さういふ所がどうも宗教の信仰に伴うて無理な註文を持たんで、「これでも聞いて呉れないか」「これでもか」といふやうな行方は、所謂非常識である、やはり知識の上の缺陷であると思ふ。

その他いろ〜のことを言つて、或は參籠をするとか、或は斷食をするとか、或はどちの角が善いとか悪いとか、或は又娘を嫁にやるにも御籤を引かなければいかぬと言つて、人事上の事柄に關して變なことを言つて人間の行動を妨害する、父親はアノ男なら確かりして居るし、嫁にやらうと思つて母親に相談する、さうすると「それでは角が善いかどうか、ちよつと伺つて見ます……」といふやうなことをやるので、随分危ない話である。それを一つ

さるに違ひない、併しお惱がしくて此方の方に手が廻らんければそれは仕方が御座らぬといふ位に、そこに堂々たる餘地を存しなければならぬ、それ以上は佛天のお思召のまに〜お委せするといふのである。それには此處で命を奪られても宜しい、モウ此處で死んだ方が宜いかも知らん、活き永らへて碌な事をしないで、却つて餘計罪を作つたりする位ならば、此處で死んだ方が宜いかも知れんから、日蓮聖人が法華經に身をまかせたやうに、一度委せた以上は、或は宿世の業因もあり、諸天善神の思召もあらうからそれに委せて、サウクヨ〜する必要はないといふ、この大きな信念に立たなければならぬ。それを諸天善神も守つて下さるといふならば、斯うして貰ひたい、ア、して貰ひたいといろ〜な註文を持ち込む、「少々ぐらゐ暴飲暴食をしても病氣にならぬやうに……」「横着はして居つても商賣は繁昌るやうに……」「容貌は悪くても別嬪が嫁に来て呉

聞くやうになると、何もかもそれに開かなければ事が決せられないやうになつてしまふ。下谷の御徒町に或る宗教團體があつてさういふ事をやつて居る、何か物を買ふのでも一々神様のお許しを受けなければ買ふことが出来ない、味噌漬を一つ買ふのでも、或はパケツを一つ買ふのでも、一々實印を捺した願書を出す、それを行らなかつたら直ぐ罰があたるといふ、えらい事をやつて居る、女中がパケツを買ひに行く、「ちよつと待て」……願書を出して本部から許可を受けてからでなければ買つてはいけないといふやうな事をやつて居る。それが非常な勢力を得て來て居る、左様な事は善良なる風俗を害し、今日の文化程度に反して居ることであるから、どうしても警察の手を以て膺懲しなければいかん、そんな事を信する者も一遍呼出して説諭しなければいけない。左様な人事上の事柄を一々迷信から干渉して來るのは、非常な害が有るのである。

すれば商賣が繁昌するといふ、これは病氣よりもモット關係の薄いことである。病氣は精神的に餘程關係のある事であるけれども、商賣の方は幾ら信心をしてたゞ商賣繁昌を祈つたからと言つて、これは餘程縁が遠いことである。やはり商賣の事は商賣の道にかけて勉強をしなければならぬ、それを横着をして居つて、さうして商賣ばかりはやるやうにしよといふのは、極めて惰い考である。けれども今日の世の中には餘程その方面の信仰が多いので、川崎の大師であるとか、穴守の稻荷であるとか、或は成田の不動であるとかいふものは、大抵商賣繁昌に關係がある、商人の參詣者が多いといふことである。本堂の床板の上に溜つて居る砂を拾つて來て、自分の店頭に撒いて置くとお客を引きつけて繁昌するとか、詰らぬことを言つて居る。あんな事が宗教の信仰である間は、教育とは一致しない、教育は人間の能力を發達せしめ、産業の發展を圖ることに努力し

或は又大本教が、世の中の立直しと稱して、大正十一年には東京が轉倒かへつて、東京に居る者はみんな死んでしまふ、早く練部に引越して來いといふことを盛んに唱へた。所が十一年が來てもさういふ事がなかつたものであるから伺ひを立てた、すると神様の御都合で御延期になつたといふ、それが無期延期であつたために、その翌十二年にアノ大震災があつたのだけれども、それは豫言することが出来なくて、ポカンとして居つた。さういふ事を餘程社會的に地位のある人々が信じて居つたのであるが、その豫言が外れたので大本教は餘程聲價を失つたのである、若しも偶然にそれが的中したならば、それ見たかと大威張をするのである、大正十二年の地震が十一年に來ようものならば、大本教萬歳であつた。併しそんな危いことを以て宗教の信仰を左右してはならないのである。

それから商賣のことでも同じ譯であるが、信心をて居るものである。それがお賽銭やお砂で出來るものならば、産業上の研究も要らなければ人間の努力も要らなくなつてしまふのであるから、川崎の大師さまに賽銭を上げただけで日本中の商賣が繁昌するならば、洵に難作もないことである。併しそれは賽銭箱に溢れる程お賽銭を上げた所が、何にもなりはしない、取られただけ損といふものである。さういふ事は今後の人間は行つてはいかぬ、苟も宗教の信仰を説く者が、賽銭に依つて商賣が繁昌するなどといふやうな者であつたら、これは偽物であるといふことに嚴重に鉄槌を下して置かなければならぬものと思ふ。そんな事に引つかゝつて人間が本氣で商賣を勉強しなかつたならば、日本は遂に亡びてしまふ。日本の現状から言へば工業なり商業なりの知識技能を十分に養うて、さうして勤勉努力して世界の産業の競争に負けないやうにしなければならぬ、それを宗教の迷信などが入いつて誤魔化して行くとい



ふことは、國運發展の上に多大なる害毒を與へるものである。であるから病氣の場合よりも、商賈繁昌の方に宗教の迷信を挿込んだ方が、モット罪が重いと云はなければならぬ。

その他常識上の問題に於いてもいろいろあるが、更に科學知識の方から宗教を批判することが起つて来る。それは段々宗教の内部に入つた問題として、科學知識との聯絡衝突の關係が起つて来る、宗教傳説などにはさういふ事が多い。例へば日蓮聖人の傳説に於ても、佐渡へお渡りになる時分に波の上にならぬ妙法蓮華經とお書きになつた所が、それが金の文字で浮んだ、船底に穴があいた所が鍔の貝が来て喰ついた、その鍔の貝には南無妙法蓮華經といふ字が寫つた、その貝が何處の寺に在るといふやうな事はいふ、さうしてそれが非常な寶物となつて、三百圓とか五百圓とかいふ價格を生じて居る。そんな事は何でもないことで、鍔の貝に何か化學藥品を塗つて

神であつて身延の山に祀つてあるやうな事は、聖人の傳記を汚すものである。

さういふ事を信じて有難く思ふて行くといふことになる、これは科學知識の方に於てどうしても許されない事である、大蛇が女に化けてやつて來たといふことは有り得ない事である。或は又龍の口の頸の座に於ても、「太刀取眼くらみ倒れ伏す」といふこと日蓮聖人も自ら書かれて居るけれども、刀が三つにボキンと折れたといふやうなことは、聖人は書いて居られない。

「一体何うして刀が折れたのだ」「どうして折れたといふことはないけれども、兎に角三つに折れたんだ」といふ事になつて居る、さうすると科學知識から言へばそんな馬鹿な理窟はないといふので、刀が折れたといふことを言ふが爲めに、あの日蓮聖人が生命を捨て、法と國に盡された純潔なる貴き行動までも否定する者が出て來るのである。所が愚かな信

火で焚れば直ぐ文字が出て來る、そんな物が三百圓は愚か、三圓の値打もあるものではない、鍔の貝が二十錢としたならば、それに一錢か一錢五厘出したら何ばでも出来る。そんな物を以て人を惑はし、又それが寺の寶物であるなど言つて居る寺が澤山ある。さういふ事が有難いと思つたり、或は又日蓮聖人の傳記に於て、身延の七面明神の大蛇が出て來たといふ事も盛んに言ふ、日蓮聖人が説法して居られた所が、一人の別嬪がやつて來た、大勢の信者が「どうも日蓮聖人の法座に若い女が來るといふのは可怪なことだ」と言つて疑つた、それを見て日蓮聖人が高座の上から水をバツとその女にかけられると、いきなり蛇体になつて「俺を疑つた奴は貴様か」と言つて飛びかゝつたといふやうな事が傳へられて居る。そんな事も無論荒唐無稽の話であるし、日蓮聖人の傳記には無い方がよいので、アのやうな立派な人の傳記にそんな愚かな事を附加へて、それが七面明

者は、刀が三つに折れたから有難い、日蓮聖人の頸が斬れなかつたから法華經は有難いと思ひ込んで居る、斬れたつて差支ないではないか、人間の頸だから、刀を以つてすれば斬れるのが當然である。併し頸は斬られても、法と國との爲に一死以てこの事を申す、不惜身命といふ所に日蓮聖人の光があるのである、頸はコロリと落ちて、その道に殉じ國に奉ずる精神に感激するのが本當の考へ方である。それを唯だ刀が折れたとか頸が斬れなかつたとか言つて「その斬れない所が有難いのちや……これは昔の迷信流の頭腦である。それは非科學的の頭腦が強過ぎるに依つて、宗教の中に多量にそんなことが混入して、それを有難く思ふて居るのである。モット科學者が聞いても感心するやうに宗教の信念を考へて行かなければならぬ。事實の方はチャンと合理的になつて居るものを、ヘマな坊さんや愚かな信者が、さういふ迷信的の頭腦から不合理に作り上げてしま

ふのである、マアごつちが餘計罪があるか知らんが坊主と信者と同罪であらう、信者がそんな話を喜ぶから坊主が言ふ、坊主がそんなことを言ふから信者もその氣になるといふ譯で、ごつちがどうとも言へない。今後は相當の教育を受けた人が信者となつて来るのであるから、そんな不合理なことではいけない、眞實の感激すべきことを以て進んで行かなければならぬ。

基督の傳記などに就て考へて見てもやはりさうである、いろ／＼非科學的の所謂奇蹟に依つてのみ信仰を鼓吹し過ぎた爲めに、西洋で宗教が生命を失ふことになつたのである、即ち科學の進歩と共に基督が生命を失つて、これに代るべき宗教が無い爲めに、唯物的文明となつて世の中が今日斯の如き状態になつて來たのである。この左傾思想にも無論罪があるけれども、西洋に左傾思想が勢力を得る所以のものは、一方に宗教が堅實なる教義を有せざりしが

それはどういふ事かといふと、先づ吾々が拜むところの神或は佛、又人間自身の本體に就ての實在の觀念といふものがハツキリして居らなければならぬそれが途中から出來たものかも知らん、さうして終ひにはどうなつてしまふか分らんといふやうなものであつたならば、本當の宗教ではない。大本教で良の鬼神といふものを非常に重んずるのであるが、それはごんごんものであるか、いつ生れていつ死ぬものか、どこで生れてごんごんのか何も分らん、それが腹を立てると人間の世の中に災難を生ずるといふ、實に詰らぬものである、腹ばかり立て、居る、痛癢玉の神様みたやうなものである。金神ナンといふものは喜んで笑つたことはない、三輪捧の金神ナンと言つて、家を建て、居れば打壊してしまふといふ神様である、平常でも怒つて居る所にそれが腹を立て、暴れ出すといふのだから堪らない、東京を打壊してしまふ、立直しちやと言つて居るが、ア、いふも

爲めである、この點に於て基督教も罪を負はなければならぬものである。今後の日本に於てやはり科學の知識が進歩した爲めに、宗教の必要は認めながらこれが復活しにくいといふことがあるならば、さういふ下らない事を宗教に附随せしめて居る人も、責任を帯びなければならぬものと思ふ。

それから哲學上の知識に入つて考へなければならぬが、これも今日哲學といふものが人文上當然考へられなければならぬことになつて居る。それは第一に實在の意識と言つて、物の實在して行くこと始め無く終り無く、どこ迄も續いて行くもののみが價値のあるものと哲學ではするのである、途中から出來て途中で壊れてしまふといふやうなものは、價値の無いことになつて居る。故にその意味をどうしても宗教の上にも考へて置かなければならぬ、哲學の知識から否定されるやうな宗教では、到底今後の人心を繋ぐことは出來ない。

のは哲學上から見て抑々神の本質が成立たないのである。

それから人間を説明するに於ても、鎮魂歸神といふやうなことだけ言うて居つて、その魂がどういふものであるかといふ事を少しも説明しない。マア今の神道の教會などは、大体哲學上の考察を遂げれば殆んど全部落第であると言はなければならぬ。少々ぐるる表面のことは工合のよいことを言つて居つても、それは淺薄な表面だけの話であつて、宗教の根本に入ればガラ／＼と崩れてしまふものである。

その他現代のあらゆる宗教が聲價を失墜するに至つたのは、根本は皆この哲學上の批判から來たのである。基督教が勢力を失つたのも、哲學上の批判から神の實在の論証が出來なかつた爲めである。唯だ神が在るといふ事を獨斷的に言ふのみであつて、如何にして神は存在するかといふ哲學上の證明が出來なかつた、佛敎の中でも段々研究すると、その實在の

論証法が一番難かしい事になつて居る。法華經の毒量品が優れて居るといふのは、この哲學的の論証から本佛の實在を明瞭にした點に於て、一切の宗教中毒量品が最も尊いといふことになるのである。阿彌陀經でも藥師經でも、或は又華嚴經が如何に立派であつても、眞の佛の實在が論證されて居ない、それは非常に難かしい問題であるが、宗教が哲學からの點を突き込まれて、それが論證出来ない限りは、將來復活する力のない宗教である。

所が日本人はその點を餘り重大に考へない所に非常な缺點がある。何でも神様と言つて敬ふといふのも、やはりそれが爲めに起るので、先づ東京だけでも今では神様の名前をかへて居るだらうけれども、平將門を神として祀つたものであるといふ、鳥越神社も將門の首を祀つたと言つて居る。品川あたりにも海から人の面みたいなのが揚つて來た。それを

言つてはいかぬ。更に科學的知識に依つて、餘り非科學的事柄を有難がつて行くやうなことを宗教に附随せしめてはいかぬ。さうして更に高い所に於ては哲學上の知識から非難されるやうな事も慎まなければならぬといふ事が、知識上の考察として當然起ることである。

その場合に佛教、殊に法華經の教へる所はどうかといふと、左様な事柄が最も能く吟味されて、是等の基準に對しては全然合格するといふよりは、寧ろその基準の模範を示す、その尺度に合するといふよりは、其の尺度が間違つて居ればそれを直してやる位な、恰も度量衡製造所の基準となるべき完全なもの有して居るものが法華經である、斯ういふことが言へるのである。學者や思想家から基準を教へて貰つてさうして法華經を批判するといふよりは、法華經を基準として學者の頭腦を教へてやつた方が早い、尺度を拵へるも一つ根本の基準である、恰も

御神体として神に祀つたといふやうなのがある、その傳來は實に愚な事が多い、神社といふ神社の縁起を調べて見ると、實に詰らないことを言ふのであるそれを假に日本の神様の本體に戻して見た所で、今の哲學的論證から言つたならば、グラツクやうなものが澤山ある、殆んどその方面の考證は附いて居ない。そこに世界的に宗教の知識が段々研究されて日本にも入つて來る、その場合に世界に於ては、宗教の問題は哲學上の批判に對抗するものを有たなければ、二十世紀以後の宗教でないに相場が決つて來るからして、そこに日本の神に就ても餘程重大な點が生ずるのである。

知識上の考察としてはいろいろあるけれども、先づこれ位の事は誰も考へて置かなければいかぬ。第一に常識から考へて、病氣とか商賣とかいふことを迷信で解釋して行く事はいかぬ。それから嫁入とかが角とかいふやうな人事上の事に就て理由なき事を度量衡の検印を捺す役人が法華經であるといつても宜い位のものである。そこに我等の信仰の喜びがある譯である。

先づ常識上の病氣の事柄や商賣に付ての事柄は、佛教を調べて見ると直ぐ分る。釋尊の在世に於ても佛教信者の中に、唯信仰の一方に偏つて商賣を輕んじたが爲に、遂に破産をして夜逃げをした者があつた。その時に釋尊は、「それは我が教を本當に信ぜざるものである、一方の信仰はあるやうだけれども商賣は商賣で大切にせよと言つた我が教を守らないから夜逃げをすにやうなことになつたのである、我々の教の半ばを信じて半ばを信ぜざるが故にこの結果が來た、是に於て我教は益々光がある」といふ説明を與へて居る。それが非常に大事なことで、信心をすからといつて商賣を横着をして、それが爲に身代限をするやうな者は、釋迦の教を守らないものであるといふことになる。又病氣の事柄に就ては、釋尊

が僧房を巡視された時に病人があつて、誰も世話を  
して居らぬ、釋尊は自らその世話をなさつて、夜半  
に非常召集をして坊さんを集められて、「病人の看  
病をし病人に薬を服させることは最も大切な事であ  
る、病人があるのに世話をしなければ助かる者も死  
んでしまふのであるから、十分に世話をしてやらな  
ければいかぬ、故に病人の世話をするのは如来を供  
養すると同じ功德がある」といふことを懇々と御説  
きになつて、皆が非常に恐縮をしたといふ事が阿  
含經の中に説いてある。そのみならず者姿といふ  
名醫があつて、釋尊と力を合せて病人を直してやつ  
た、又僧房には皆醫者が居つたので、坊さんであつ  
ても布教をしないで醫者専門の者が澤山ある。丁度  
軍醫は軍服を着けて劍を提げては居るけれども、醫  
者であつて人を殺すのではない、一緒に歩いて居る  
と同じ軍人のやうだけれども、それは病氣を癒す軍  
人なんである。坊さんでも説教などをしないで、醫

學上の知識を有ち經驗を有つて居る者が同じやうに  
法衣を着て居つて、病人と見れば診察をして治療を  
してやるといふ者が澤山あつた。それは佛敎の組織  
の中にちやんどさういふ風になつて居るのであつて  
日本に初めて佛敎が渡來した時に聖德太子が四天王  
寺を造られた中には、矢張その通りに施藥院である  
とか療病院であるとかいふものを合せて一箇の寺  
とせられたのである。今の所謂病院といふものはお  
寺の外にあつたものではない、寺の中に屬して居つ  
たものである。さうして看病のことの如きも非常に  
奨勵された、佛自ら看病をせられる位であるから、  
佛敎を信する者は家庭に於て、將又餘力あれば世人  
の病氣の看病をしてやるといふことは最も功德の多  
い事である、日本でも光明皇后が病人を集めて看護  
をせられたといふことは名高い事實である、體の腐  
る癩病のやうな者までも自ら風呂に入れて、その膿  
を取つて御遣りになつたといふ極端な話まで傳はつ

て居る位である。皇后陛下であらせられても平民の  
病人を御世話になつて、今日は赤十字の事業である  
とか其他病院關係の事業に、皇后陛下が台臨せら  
れることもある譯であるけれども、自ら手を下して  
病人の看護を爲されたと傳へられて居る。是れ皆佛  
敎の教に基いたことである、決して迷信的に御水を  
飲ませて病氣の平癒を祈つたといふやうなものが佛  
敎ではない。併し信仰から病氣の癒ることもあるか  
ら、それは全然否定することは出来ないけれども、  
前にいふ通り三十七度の平熱の程度といふことが問  
題である、餘にさういふことを濫用してはいけ  
ない。

それから方位とか方角に依つて色々人事上の事柄  
を左右するといふことは、釋尊は絶対に反對をした  
のである。當時婆羅門の方に於てはさういふ九星の  
やうな事、或は方位のやうなことをやかましく言  
ふて居つたが、釋尊はそれ等を悉く否定せられて、

人間が善を行ふには方角もなければ時節もない、如  
何なる時でも善い事はして宜しい、悪い事は何方へ  
向いてしても悪いのである、斯ういふ教を立てられ  
た。方角の良い方へさへ行けば横着をしても幸福が  
來る、悪い方角へ行けば正直にしてゐても災難が來  
るといふやうなことは、實に非論理なことである、  
西を向いても東を向いても、悪は悪、善は善である  
から、方角などに善悪はない。殊に方角なんといふ  
ものは、この地球の上では東から見て西といふけれ  
ども、向ふから言つたならば東になる、東西は自分  
の位置に於て言ふことであつて、大きく考へたなら  
ば西も東もあるものではない。佛敎は善惡の業の力  
を説いて、左様な迷信を悉く排斥して居る、今日  
が善い日だの、今日が悪い日だのといつて、日に善  
惡があるものではない、自分の行ひに善惡があると  
いふことを強く教へたものである。

それから科學の知識に關するやうなことも、佛敎

に於ては成べく非科學的のことは言はないやうに注意されて居る。それは佛教の中に因明學といふものがあつて、總て合理的論證法を貴んだものである、因明は所謂論理學であるから、嚴密なる法則に依つて物を判斷して行くのである。大乘佛教の中に非科學的のやうなこの見えるのは、是は科學の範圍で言ふのではない、絕對世界の事を言ふのである、法華經などにも寶塔が涌現して空中に昇つて大音聲を出したといふやうなことは、現實の人生の問題ではないので、絕對界の事を言ふのであるから、それは文學的の言表はし方もあれば、哲學的の言表はし方もあり、それは日常の所謂科學知識の範圍外のものである。丁度日本の建國の神話に屬するやうなものであつて、天照大神が天の岩戸に隠れ給ふて世の中が眞つ暗になつたといふやうな話と同じことである。それを今日の科學を以つて彼此れ批評すべき問題ではない、超科學的の絕對界の事柄である、それ

を混線するから佛教が非常に怪誕のやうに見えるのである。法華經でも地上的の説明としては合理的に説くのである、例へば藥草喻品、或は方便品、或は壽量品等と言ふたならば、一つも非科學的の説明といふものはないのである。唯だ絕對界の消息を説かんとする化城喻品或は寶塔品、涌出品などになると、今の所謂人智を以て判斷の出来ないやうな事が説かれて居るのであるが、是は古來托事付法といつて、さういふ事柄に寄せて其中に或る意味を教へるのである。丁度御伽噺に寄せてその中に縫うて居る或る精神を教へる、桃太郎の話に、桃が流れて来て中から桃太郎が出たといふのも、「桃の中から人間が生れてたまるか」……それを言ふのではない、桃太郎が斯の如き事をしたといふ話の中に、大和民族の國民精神を教へんとして、それに興味を持たせる爲に「爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に」といふので子供はそこに興味を感じて聞いて行く、其の中に桃

太郎が出て来て斯ういふ事をしたといふ所に、興味と感激を以て民族精神を養成して行くのである。それを「桃の中から桃太郎が出る筈がない」などといふのは、愚な者のいふことである。童話には童話の解釋法式があるが如く、矢張佛教の絕對界を説明した法式はそれを解釋する知識に依らなければならぬそれを托事付法と古來申して居る。そんなことも知らずに「佛教は怪誕無稽である」と言ふやうな教育者が多いのであるが、それは御伽噺に向つて科學的の知識を應用して批判して居るの愚と少しも違はないのである。

それから哲學上のことは、佛教は最も哲學味に富んだ宗教として華嚴、法華、涅槃何れも非常に嚴密な哲學思想から説明されて居る。殊に法華經壽量品に於て立派に本佛の實在を説き、隨て本佛の實在から又人間の本體も不滅のものである、十界互に具するといふことから眞の佛の實在を論証して、自己の

實在をも明瞭にせられた、其点に於て世界唯一の哲學的宗教である、實に法華經は唯一無二なるものである。だから他の宗教は「哲學の批判などは勸勉して呉れ、それを言はれては一寸困る」、「今後宗教を復活するに付ても、哲學からの論證だけは差控へて呉れ」……といふことになる譯であるけれども、法華經はそんな流言は言はない。嚴密に哲學上の批判を加へて宜しい、科學上の批判も宜しい、常識上の批判も宜しい、併し科學を盲信し過ぎて科學の範圍を超えた所まで考込んだり、常識が不完全であつて常識と思ひながら己の常識が不備であつて物を頼つたりすることがないやうに、もつと賢くなつて、もつと本當のことをやつて呉れといふことを、法華經の方から反對に注文する譯である。斯様にして智識上の考察より見たる宗教選擇の基準と之に就ての佛教の教へる所は最も明瞭であると思ふ。

(次號完結)

# 立正大師の功勳

本 多 日 生

## 三、法華精髓の發揮者

次に日蓮聖人の功勳として考へなければならぬことは、法華經の精髓を發揮したといふ點である。法華經は日蓮聖人を俟たずして世に尊敬されて居つたお経である、支那に於ても、羅什三藏に依つて一たび法華が譯せられるや、靡然として法華經の聲價といふものは擧つたものである。一切經の中に於て法華經が最も宜しいといふことは支那に於ても盛んに吹聴された、殊に天台大師一たび出られてからは、その矢表に立つ者が無かつたのである、支那に於ても法華經は佛教の中に於て最も優越なる地歩を占めたものである。それから日本に來てもいきなり聖德太子が佛教を紹介せられたけれども、やはり法華經

が一番宜しい、聖德太子は別段天台大師の書物は見なかつたけれども、やはり偉い人であつて、一切經の大體を御覽になつて、これが一番宜しいと言つて一切經の頂上に法華經を載せて、これを以て日本はやつて行かなければならぬ、即ち「鎮護國家の妙典なり」と申して居られる。さうして自から法華經の講釋を書かれて、「法華義疏」といふものが出來て居るのである。左様な譯で聖德太子の勢力に依つて日本佛教といふものは初めから法華經が中心になつて來て居る。そこに傳教大師が出來て法華經を發揚し、桓武天皇がこれに賛成せられて比叡山を開かれたのであるから、非常な勢で法華經といふものは勢力を得て居つた、譯も法華經が價值無きものだと

いふやうなことを説く者は無かつた。法然や弘法が出てさういふ事を言ひ出したけれども、それは部分的の議論であつて、日本の文化の全體から見たならば、法華經といふものは非常な勢力のあるものであつた。

然らば日蓮聖人が法華經を弘めると言つても、唯だ法華經が宜しいといふだけならば、別段日蓮聖人を俟たずしてわかつて居つたのであるが、日蓮聖人が法華經に盡された功績といふものは、その表面の聲價ではなくして、法華經の内容の精髓に就てこれを發揮した點にあるのである。

その精髓とは何であるか、南無妙法蓮華經と唱へる唱題行を開いたといふことが一番善いのではない。それも一つではある、法華經の修行を信念に戻すが爲に、簡單なる南無妙法蓮華經と唱へることを教へられたといふことも、一つの大きな功績ではあるけれども、併しそれが法華經の精髓全體といふも

のではない。法華經は前にも申したやうに三寶歸依の教である、これは一切經がさうであるが、殊に法華經は三寶歸依の教であるから、即ち法華經に依つて現れるところの尊き佛、久遠實成の本佛と申して前に申す天月の如き佛を日蓮聖人は極力光顯せられたのである。さうして法としては法華經は一切經の中に於て勝れたお経である、即ち第一のお経であるそれから僧即ちそれを弘める人、上行菩薩、これも最も偉い人である、それは我自からそれに當るのであるといふことに依つて、一番善き佛と法と僧との三寶を光顯した、それが法華經の精髓として顯れて來て居るのである。

その宗旨の様式を三大秘法として主張せられた、即ち本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目と言つて居るが、これに就ての考へ様が非常に大事なことになるのである。

三大秘法の第一は本門の本尊といふことであるが

この本尊といふことが、たゞ曼茶羅を圖顯せられたことが一番有難いと考へて居る人が多い。それは曼茶羅を圖顯されたのも無論結構な事であるけれども併し本門の本尊の特色といふものは曼茶羅といふことではない、その點は最もハッキリ意識して置かなければならぬ。本門の本尊と日蓮聖人が言ふのは、曼茶羅に圖顯したから本門の本尊と言つて居るのではない、本門の本尊とか述門の本尊とかいふことは本佛を光顯すると否とに依つて岐れて居るのである。南無妙法蓮華經は本門の本尊でも述門の本尊でも何處にでもあるので、それは何も佐渡已後には限らない、建長五年始めて題目を唱へ出した時から南無妙法蓮華經と言はれて居るのである。けれども佐渡に渡つて始めて三大秘法を顯すといふのは、この曼茶羅の真中に南無妙法蓮華經と書いたといふことが一番偉いのではない、そこに開目鈔といふ御を書かれて絶對本佛の尊嚴を發揮せられた點にあるので

とも言へないから、今度は一掃も早く大事なことを書いて置かうといふので、佐渡にお着きになると直に筆を執つて書き始められて、翌年の二月に完成したのが開目鈔上下二卷である。その開目鈔は何を中心にして書かれたか、決して曼茶羅を圖顯するといふことを喧しく言つたものではない、開卷劈頭から「夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親是れなり」といふ、この眞の絶對尊敬者といふものを一切衆生の前に知らせなければならぬといふことで、さうして今申す統一中心の本佛を光顯されたのである。その事は開目鈔の全文を精讀したならば疑ふ餘地の無い事である。

さうして又本尊鈔といふものをお顯しになつた、曼茶羅を圖顯する前に本尊鈔をお書きになつたけれども、これも多くの人は誤解して居る、本尊鈔は曼茶羅の義解だと思つて居るけれども、何も曼茶羅だけ言ふのではない。本尊鈔には、釋尊の臨土が普賢

ある。たゞお題目が有難いといふことだけならば、建長五年四月二十八日、旭に向つて南無妙法蓮華經を唱へた時からわかつ居る、日蓮聖人が永い間秘して居つたといふその秘訣といふものは、即ち三澤鈔に明かに言はれて居る通り、この大事なことを言うたならば弟子達が披露して眞言の者どもが知るであらう知つたならば公場對決に出て來まい、さうすれば自分の佛敎統一の大目的を達する上に工合が悪いからといふので、眞の大事を言はなかつたといふのである。然るに文永八年九月十二日龍の口に於て頭はねられんとした時より考へ直して、あの時頭が飛んで居つたならば、公場對決に希望を掛けるが爲に眞の大事を言はずに置いて、弟子達にこれを知らさずに死んでしまつたならば洵に不憫な事であつた、今度佐渡が島に流されて佐渡の土にならぬとは言へない凍へ死なぬとも言へない、どんな事で暗殺に遭はぬ

文殊であればそれは述門の本尊である、上行等の菩薩を臨土にせられるならば、その本尊は絶對の釋尊であるといふことで、即ち釋尊の絶對を光顯するところが本尊鈔の眼目になるのである。本門の本尊といふことは何が中心であるか、題目が有る無いといふことに依つて、本門の本尊であるの無いのといふ問題は起らない、ただその釋尊が絶對の本佛であるといふことを認めるや否やといふことが、本門の本尊の中心問題である。而して又それが開目鈔の中心思想である。

又三大秘法鈔などにも、本門の本尊といふのは何かといふと、『壽量品に於て建立するところの教主釋尊是なり』と仰せられて、やはり釋尊を大切に言はれて居るくらゐの事である。であるから曼茶羅式の本尊が悪いといふことは無論ないけれども、曼茶羅のやうに澤山のことを羅列したといふことが一番善いのだと思つて居ると大に違ふ。澤山に書きなご

お願

れたけれども、これは釋尊本佛の作用として現れて居るのである、諸天善神となつてお働きなさつてもそれは前に言ふ統一神教の意味に於て統一して居る、單一神教とか唯一神教とは撰を異にするから澤山に書きなされたけれども、本へ戻せばたゞ一人の釋迦牟尼佛である。

(次續)



本多上人の御法戰の往昔を憶念致し度いので甚だ勝手なお願ひですが、雜誌「統一」を創刊號からお持合せのお方、又は全部纏らすとも明治卅年前後からでもお手許におありのお方は、當方より參堂拜讀することをお許し願へないでしょうか、路の遠近は厭ひません。そして其目的は四恩報答の爲めで決して自利の爲めでないことを誓つておきます。

幸に御許容下さるお方は左記へ御一報御願ひ申し上げます。 恐々

横濱市磯子町一四八

磯部 満事

◆日什大正師略傳 第二回

故權大僧正 竹内日照師記

皆これ徒ら事てはないか。

これを聞いた慈邊僧正は「吾も又これを思ふことひさし然れども今や世亂れ山も靜かならず如何ともすることが出来ない。聞くところによれば背つて此の山の淨光院に住せし、是性房蓮長、後に日蓮と稱し盛んに關東に法華唱題の行をひろめたりと、汝東國に縁あり往いて尋ねよ」と語つた此時よりして上人の胸中には一團の疑問を懐くと共に末法應時の大法を求めて一切衆生を救はんとの大菩提心が勃然として湧いて來た、あゝ大なる道念の前には名譽も利欲も何ものもない、心中大いに期する所あり。

遂に三千の學生等が父母を慕ふが如き熱情を後にして斷然學頭の榮職を辞し紀元二千三十一年建徳二

謹で法華經の現文を拜するに今の時代は釋迦牟尼佛の説きし後五百才の時に當り權教方便の諸經悉く利益減盡して純圓一實の妙法蓮華經獨り一天四海に廣宣流布し末法濁惡の闇黑世界を救ふの時である。我祖傳教大師俄に万里の波濤を渡りて唐土より傳ふる所の天台の教觀其理高く其旨深きも末法今代の時機に適せず天下萬民いまだ法華の名字を聞かざり。従つて國を救ひ民を救ふの大利益をほとこすことも出來ぬ後の五百才遠く妙道に沾ふといひし天台智者の言も末法太々近きにありとの傳教の遺誠も何れの時か實現する事を得ん比叡山頭堂塔伽藍は高く天にそびゆるも三千の學僧は白雲深き處に觀念觀法の智解をほこることも畢意世を益せず民を利せずんば



年歳五十八近江路より伊勢を拜して箱根山武藏野を  
過ぎては白河の關、山又山谷又谷を越えて故山の會  
津にかえられたのは其年の秋であつた、玄妙能化が  
志を立て、郷關を出て、より早四十四年人の身の  
上には變れる事ども多いが、東山の流れば清く、羽  
黒山の松の縁は、何れもいつに變らぬ明眉の風光を  
爲して居る、この世態の實相に接しては、さぞや詩  
的感想が湧いた事であらう。

能化は万事を措いて先づ四十三のいにしへ人界を  
去りたまふ蒼苔なめらかなる慈父悲母の墓前に拜跪  
し追慕の至誠をこめて香華を供へねんごろにその冥  
福を禱られた、其の時の詠歌に、

何時の日の何時の時にか我もまた

なき人数に入相の鐘

上人年五十八の時であつた。

日本最高の比叡山大學の總長たる榮職を一擲して

ふに及ばず下總真間中山等に至らふとした、時に羽  
黒山東光寺の僧等大に驚きあひ議して曰、能化の齡  
七十になん／＼とし學徳一世に高く其名天下にあら  
われる、今俄かに改宗せば天台一宗の衰微を招かん  
夜中ひそかに上人の室に入つて絞殺せんと、此の中  
に善如房(後に日仁)といふが密に此の事を上人に告  
げ且今夜羽黒山を立退くべく一首の歌を書して以て  
上人をいさめた。

秋風の吹くにつけても思ひ知れ

草の葉末に置きし身の上

(續)

故郷會津に還られた玄妙能化の心事、そこに超凡脱  
俗の偉大なる性格が在る、宏図を懐ける非凡人の前  
には名譽も地位も問題でない唯宇宙の大道を求めて  
之を體得して而してこの國をまもりこの民を救はん  
どの衷誠の存するのみである。

時の國主輩名若狹守貞盛は上人の外戚であるが、  
上人の歸郷を聞き大いに悦び固く辞して止まざる上  
人を其祈願所羽黒山東光寺の住職たらしめた、又上  
人の學徳を聞き傳へ笈を負ふの學生遠近より雲の如  
く集まり玄妙能化の名聲遠近に鳴り渡つた、然れど  
も上人は一向經文をかながへ釋書を閲して他日大い  
に時代救濟の化導を起さんことを期して居た、一日  
不思議にも多年追慕せる日蓮聖人著述の開目鈔如説  
修行鈔の二書を感じ、一讀の下多年の疑雲忽ちに  
晴れ斷然天台宗を捨て、日蓮聖人の教義に歸伏し自  
ら名を日什と改めた、上人は是より更に深く日蓮聖  
人の教義をさぐらんとして近郷の日蓮宗の寺院は言

## 末法の佛教

會費 一ヶ月 半ヶ月 一ヶ月  
貳拾錢 七拾貳錢 壹圓四拾四錢

送料共 同 同

末法の佛教は大聖人の御魂の叫ぶそのまゝです。  
この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福  
を味ひませう。

この意に於て皆様に末法の佛教を御勧めします。

一、大聖人御遺文を毎月發行するのです

一、文体は全部かなが付て居ります

一、難解の文には略註があります

一、毎號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります

一、實費で御分ちするのです

一、見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい

東京淺草清嶋町

統 一 閣 圖書部

東京四谷南寺町法恩寺

御 遺 文 普 及 部

東京神田三崎町二ノ二

振 興 社

申 込 所

# 西郷翁と日蓮聖人

塚本松之助

西郷南洲翁が千古傑出の人格者たることは、誰しも異論のない事であるが、さて其の修養は、何に依據したのであらう。是までの研究では、鹿兒島の伊藤藤潜龍に就いて、陽明學を究め、旁ら朱子學、禪學をも學ばれたといふ事に傳へられて居るが、だんだん調べて見ると、更に日蓮聖人を欽仰して、修養を積まれたといふ事が明白になつた。

翁は度々江戸へ出て居る中に、下總中山法華寺の執事から、御遺文録を贈られた。大いに喜んで熟讀して行くと、ハツト翁の眼に映じたのは、日蓮聖人御書と乙御前御消息であつた。日蓮聖人とは如何なる人ぞ。こは婦人であるが、其の身分、經歷は明瞭でない。其の夫も如何なるものか分らない。聖人が

鎌倉に居られる頃弟子となつたらしい。聖人が佐渡に流され給うた頃は、夫は既に此の世の人ではなかつたらしい。そこで彼女は滿腔の悲哀を包み、一子乙御前を抱き、非常な危険を冒しつゝ、北海の寒山佐渡が島に日蓮聖人を訪問した。

當時鎌倉から佐渡へ渡るのは、困難中の困難で、堂々たる男子と雖も、尙難しとする所であつた。然るに信仰といふ鞏固な基礎の上に立てる日蓮聖人は屈せず撓まず千艱萬難を突破して佐渡が島に到着した。流石の日蓮聖人も喜悅と満足との餘、一篇の御手紙を賜はり、且つ日蓮聖人といふ名を授けられていでや其の御手紙を左に摘録しよう。

然ルニ玄奘ハ西天ニ法ヲ求メテ、十七年、十萬里

ニイタレリ。傳教御入唐但二年ナリ、波濤三千里ヲヘダテタリ。此等ハ男子ナリ、上古ナリ、賢人ナリ、聖人ナリ。イマダ聞カズ、女人ノ佛法ヲ求メテ千里ノ路ヲワケシ事ヲ。龍女ガ即身成佛モ、摩訶波闍提比丘尼ノ記別ニアヅカリシモ、知らズ權化ニヤアリケン。又在世ノ事ナリ。男子女人其性本ヨリ別レタリ。火ハアタ、カニ、水ハツメタシ、海人ハ魚ヲトルニタクミナリ、山人ハ鹿ヲトルニカシニシ。女人ハ物ヲ嫉ムニカシコソトコソ經文ニ明サレテ候。イマダキカズ、佛法ニカシコソトハ。女人ノ心ヲ清風ニ譬ヘタリ。風ハ繁グトモ、執リガタキハ女人ノ心ナリ。女人ノ心ヲ水ニ畫クニ譬ヘタリ。水面ニハ文字トドマラザル故ナリ。女人ヲバ狂人ニ譬ヘタリ。或時ハ實ナリ或時ハ虚ナリ。女人ヲバ河ニ譬ヘタリ。一切マガレル故ナリ。……須彌山ヲ載キテ大海ヲ渡ル人ヲバ

見ルトモ、此女人ヲバ見ルベカラズ。砂ヲ蒸シテ飯トナス人ヲバ見ルトモ、此女人ヲバ見ルベカラズ當ニ知ルベシ。釋迦佛、多寶佛十方分身ノ諸佛上行無邊行等ハ大菩薩大梵天王、帝釋、四王等、此ハ女人ヲバ影ノ身ニ副ガ如ク守リ給フラン。日本第一ハ法華經ノ行者ハ女人ナリ。故ニ名ヲ一ツ付ケ奉テ、不輕菩薩ノ義ニナゾラヘン。日蓮聖人等云云、相州鎌倉ヨリ比國佐渡ノ國其中間一千里ニ及ベリ。山海ハルカニヘダテテ、山ハ峨々タリ、海ハ漫々タリ。風雨時ニシタガフ事ナシ。山賊、海賊充滿セリ。宿々、泊リ泊リ、民ノ心虎ノ如シ、犬ノ如シ、現身ニ三惡道ノ苦ヲ經ルカ。其上、當世ハ世亂レ、去年ヨリ謀反ノ者國ニ充滿シ今年二月十一日合戰、其レヨリ今五月ノ末、イマダ世間安穩ナラズ。而モ一ノ幼子アリ。預クベキ父モタノモシカラズ。離別スデニ久シ。カタガタ筆モ及バズ。心辨ヘガタケレバトドメ畢ヌ。



機密に涉る点もあり遺憾ながら其点省略して他を略記せば、

今夕は本多現下から何かお話しするやうにこの御命令でありましたが、斯くお歴々の先輩が居らる、前に立つことは甚だ潜越極る次第であります、併し考へますれば此のお集りは他人行儀ではありませぬ、皆同志であれば自分の考をば申しあげて此佐藤は恥のかき初めをやりませぬ、第一の犠牲者は佐藤が全く適當であるかと考へたのであります。だから別に六ツかしく申さず自分の考であることを卒直に申し上げませぬ、それに時間も急ぎませぬ事でもあり簡単に申して皆さんの御批判をお願致します、演題は「我國の現状に就て」であります。私は今日此所にまゐる前に日蓮聖人の御書き遊ばした「立正安國論」を拜讀致しまして、いつもながら深く感じました、其中に

「世皆正に背き、人悉く惡に歸す、故に善神國を捨て、相去り、聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り、鬼來り災起り難起る、言はずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。又云く  
誘法の人を禁めて正道の侶を重せば國中安穩にして天下泰平ならん、乃至早く天下の靜謐を思はば、須らく國中の誘法を斷つべし、又云く國土亂れん時は先づ鬼神亂る、鬼神亂る、が故に萬民亂る」

一般には第三インターナショナルの指令に従ひ、日本に對しては經濟組織や國体の方面、又は身分や特權、土地所有制の廢止であるとか、軍隊の撤廢、乃至萬國民の國際的結合等の外に民衆の爲に有ゆる國有を開放せよとか、宣戰の決定は勞働者の支配に移せよとか申して、社會安寧秩序を乱すやうに計つてゐませぬ、其他教育機關に對しても中央機關を廢して地方自治に移し、又教育に關する事までも學生を參加せしめよと主張するのであります、工場職工達に向つても奇抜の方法を以て宣傳致してゐるので、今日の思想は大いにお互が決心してか、らねばなりませぬ。

今や防衛事には力を盡してゐらる、やうですが、軍人の目からは守勢では戰に勝てないので、思想戰に於てもこれと同様であると思はれます。自分が大學校にゐました時にもよく學生に講義しまして、敵に一つの欠點があり味方に八つの欠點があつても、其の敵の一つに對して攻勢を採れと教へました。

共產思想の彼等の用ふる言葉は六ツかしいので、私にはよくわかりませぬが、搾取階級とは、出ないやがるものを取り取るから搾取といふそうですが、それでは彼等が勞力を出さず惜しがつて罷業したり怠業するの、立派に搾取であります。又働かざれば食

今日頭に入れたのは、これでありませぬ、今日は人々に背いております、故に聖人や善神は相次で去らるゝ、魔來りと申しましても他に特種の惡魔があるのではなく、矢張り人間の魔であります、今日は正に此の通りではありませぬか、果してそうであれば國中の誘法を斷つべしで、國中を害毒するものを悉く叩きつけねばなりません、併しそれは決して敵ではありません、彼等は皆同胞であり、敵へざるの罪であります、よくいひ聽かせて反省せしめねばなりません悟らしむる事です。

然るに現代の世相はどうか、不肖の私何も知りませぬが、自分の手に入る情報では凡てに於て行き詰りのやうに思はれます、調ぶれば調ぶる程、恐ろしいのは赤の思想であります、これを退治せねばなりません、此所には先輩がゐられますから申す迄もありませんが、その結論を申し上げますと、萬一我軍隊が間違へばこれ切りの思はれます、そこで彼等は軍人に向つての宣傳はどうか、階級や官等を撤廢し上下平等にしようといふのです、又言論や集會等の自由及び手當給料の増額等數種のものば、極めて巧妙な方法で赤化の宣傳をやつてゐます、更に又新兵には自分の畑に育つたものを送り込むので、赤い新兵も相當居ります、少し色の着いたのは夫等の三四倍にもなりませぬ。其外水平社に向つて、又社會

ふ可らず等と申す事も働いたり食べたりは同時に出來ない事で、働いて而して後に食ふ事を間違へたり軍國主義だなんど皆云ふ事が違つてゐます。萬事世の中の工合が自分に都合のよいことを基として、世間を掻き廻さうとするが、凡ては觀察が違つてゐるのではないでしようか。かう申すと失禮であります、日本の學者は我國の歴史にさへ唯物史觀的に見てゐる人もあります、甚しいのは我國にも奴隸制度ありと申します、忠義なんといふものは武士が録を食んでゐるために起るのであるから、夫は奴隸であると申します、日本の昔からの美しい道德結合をも、物質から見定めてやうとしますが、これは奴隸と呼ぶ譯には行きませぬ。すべて今の思想界は西洋の思想を其まゝ、採容れますから、研究の冷かな方面ばかりで、何事にも理義が主であつて、情操の温味がありません、これが今日の濁濁を招いたものでありますまいか。

一体が理性の人となつて、何んでも、かでも、法だ規則だ、適法だ、といふが、今日の急務は昔からの日本人たるの本分を守るが宜しくないのでしようか、此日本を忘れぬ處が、世界の光となつて現はるるのであります。彼等は平和を口に求むれば平和が直ぐ來ると思ふが大間違で、それでは金持になりたいたいと思へば、なれる筈だが、それはまゐらぬ、戰爭を惡魔と

思つて軍備を呪ひますが、こんな話しがあります、ある島の端に燈台が出来て晝は赤い籠が揚り、夜になると赤い燈明があがります、それを土人が遙かに見て何であらうと不思議がつてゐると、やがて大暴風が来る、土人共はあれは悪魔である、退治してしまはねばと、決死隊を募つて之を破壊し凱歌を奏したといふのですが、軍備縮少は益々戦争を増すもので、軍人があるから戦争があるとするのは大間違ひ丁度此暴風の信號を考ふる時に明瞭であるやうに、これ等を今思想界でやつてゐるのです。

国防問題につひても昨朝の新聞に最上で或る旅人が山を越へよつた處が途中で何かキツキと八かましく叫聲がするので、見ると猿が六七十匹もゐて、熊鷹が五六羽と喧嘩をしてゐたやうで、それは始め熊鷹が猿の子を取つたために、何でも三時間許り戦闘を續けたさうですが、遂に猿は敗れて熊鷹が凱歌を奏したといふ事です、これは當然でありまして自分ば質にまい教訓であると感ぜました、海軍がなければこの猿のやうなもので結果知るべきのみであります。

彼等は神は人に自由を與ふるものである國家が一家の幸福を奪へば、それは罪惡である、今の國家なるものは罪惡で、兵隊は奴隸だと申して、美しい我道徳をば無視してゐる處に、彼等の情けない生命がある。

の四小冊子を來會者に配布し晚餐に移る、食事後井上閣下の滯米中の感想談あり、我國体を國民にもつと自覺せしむる必要ありとて北米人の愛國觀を語られ、更に體驗談として新潟木崎村に於ける彼等の宣傳に對する當局者の穩和手段にあきたらずして、職責上軍隊の自衛上、在郷軍人會を最も堅實の思想を以て模範的に致す爲め、將校に屢々講演せしめ、機會毎に之を發達せしめ、新發田司令部にも命じて極力善導に竭したので、彼等の農民學校も漸く三名の入學者に過ぎず、遂に失敗に歸した。

要するに健全思想の發達が一番大切である。近頃では地方の人達は今考ふれば私達は全く馬鹿で彼等に乘ぜらるゝ處であつたと判りましたと、覺醒して居る、此實例に徴するも佐藤中將の仰せられた通り、國体を一般に知らしむることを肝要と思ふと述べられ。

下村宗教局長は、私は少しく方面を替へて申し述べしごとく、宗教界に於ける偽宗教、惡思想、例へばかの天理研究會の如き、又大本教の如き、其等は實に危険で、彼等は我國体に關する大問題である、實に我國の宗教界には等等程大袈裟でなくとも、淫祠邪教が多い、そして天理研究會の如きは痴人の夢でたわいもない事

るので、實に其觀察を誤れば怖ろしいものです、此思想の状態は慎重に考へねばなりません、彼等も我同胞であります、慈悲の眼を以て見ねばならぬ、親は悪い子供程可愛いものです、罪あれば我をつみせよ天つ神、

民は我身の生みし子なれば、明治天皇の御製を思ふ時に一層深い感じが起ります、國の誇を失へばそれは亡國であります、國民が其特色を失へば亡國の民であります、吾等は日本人なりとの信念と自覺に依つて進むべきものであると信じます、これを最後の一言と致します。

猶先輩に依つて御批判を乞ひたいのは、現代の世相は政治が悪ければ、これはとても直りますまい、我憲法は諸外國と異り、明治天皇の御慈悲から決して國民が満足を得んとして得たものではない、國民の幸福を思はれて、天皇陛下から與へられたものであると思ひます。

憲法の解釋方に就き決して歐米の如く國民から要求して得た憲法でなく幸福ならしむるために頂いた、即ち權力關係からでは決してないと思ふ、御批判を仰ぎたいとお結びになり一同の共鳴感激は溢れた。

暫時休憩中に「創立者の挨拶」山岡博士の「日本共産黨事件に就て」永井氏の「マルクス主義共産主義の疑點に就て」及び「大日本國民の覺醒を促す」

である。大正十三年以後檢舉の始まる前に、數万の信者があり、數千の宣傳者を有して、夫等が下層階級を動かした、これに對して世間も政府も無頓着の傾があるが實は容易ならぬものと私は思ふ。

何故にこんな信仰が國民の間に弘まるのか、其原因を調ぶれば大体三つある、一は矢張り左様なものに對する法規の不備で、未然に防ぐ事と事後には徹底撲滅を計る點が不備である。

二は宗教に對する教育が足らぬのみならずやつてゐないから、批判力がない、小學校出たばかりの者は丸で何も知らぬ爲め、妙なものに慾張り迷ふ、彼等の大多數は小學程度で、正信と迷信を知らぬ。

三は宗教家の働が鈍い爲めで、大本教でも天理研究會でも、宗教教化が足りておれば、そう擴がる譯がないと思ふが、信者を調べても眞の信仰がない、これは宗教家が睡つてゐるから、其處に乗する次第と思ふ。

法規や教育は爲政者に屬するが、宗教の方は宗教家諸師が、もつと熱をもつてやつて頂きたい、既成宗教は力が弱いといふ、此は惡口でせうが、吾人は釋尊にまで還らずとも、聖徳太子とか傳教大師位の處まで還つてもらいたい、殊に國家思想の高潮に達した處の日蓮聖人迄かへりてゆけば、惡宗教は防がる

と思ふ、日蓮門下が少し一致されてはどうか、あまりに宗派が別れ過ぎてゐると思ふ、一つ聯盟されては如何、幸此度本會で聯盟され、日蓮主義で布教熱心なれば、悪思想が防がる、ではないでしょうか、淫祠邪教は文明國として耻辱である、と最近の出來事に對する所感を述べられ。 次で

自己の今日迄の青年學生に對する體驗上よりせば共產主義の根本に向つての我々の批評は、今迄少し足らぬのではなかつたか、たとへそれが露國にあつても、我國に於ける思想が磐石の上に築かれてゐるならば、敢て恐るべきでない。今はどうしても先程佐藤閣下のお言葉のやうに政治家を指導するのが大切ではないでしょうか、赤燈台の譬もあり、我々は根本に働きたいと思ふので、それが本會としての任務ではありますまいか、最近の市政實例の如きも亦地方の青年に基た悪影響を及ぼす、廣島縣下帝釋焼の水田事件に對する資本関の不自然無情を痛撃し、如此は自ら惡化せしむるもので、陛下の御意にあらざる政治家に依つて、左右されんとするを遺憾とする、今一つは思想に於て「立正安國論」に於ける魔來り鬼來るのは魔鬼が原因でなく災難の起るのは政治によるべきであつて政治の改善を欲する者であります。佛教は物心不二であるが故に北米に過激思

想の發展せぬのは經濟上の豊かなる点が大に關係してゐると思ふ、本會に於ても此思想の内容を經濟問題の方にも考察を加へてやつて頂く事を切望すると、佐藤閣下舞鶴司令長官時代の人格感化等に及び熱烈の御意見を陳述された。 續いて態々本會の爲めに京都より來られた細野閣下は

京都は各宗が集まつてゐるので、其研究をしてゐるが、各宗共に舊はぬ、しかも迷信で導くものが蔓延する、これは政府でしつかり取締つて頂きたい、宗教家は無力であるから、政府は善良なる宗教家を保護し助長せしめて頂きたい、醫師の免狀は八かま、此点大いに必要と思ふと力説された。 終りに浦川先生の共產黨事件に關して職責上お取調べになつた實際を語られたが、それは秘密に屬する事が多いので、残念ながら省略することに致します。 時間も十時になつたので、 本多現下は 本會は未だ運動方法等考慮中であり、今迄諸氏各位のお話し下さつた点は、個人としては同感に存じます、門下の聯合や共同戦線に對しても、望月師ともお話し致しました、事案なるか爲めに本會の

創立を、一般に御相談もせずに行つた、そして政府に對し又經濟問題に就ても、相當考へてゐらるゝ皆さんと共に、無論夫等は研究と共に遂行致したい、そして研究会は毎月開くか、又は臨時に催すか、いづれ後日協議決定致します。今晩はこれで閉會と致します。と謝辭を述べられ、憂國の各士は大なる感激と誓盟に滿されて午後十時半散會せり。

●創立者の挨拶

本日茲に知法思國會の創立記念の爲め、同志懇談會を開催致しましたる處、斯くの如くに各位の御來會を得て開會するに至りました事は、創立者一同の深く感謝して措かざる所であり、茲に創立者を代表し、謹んで御禮を申し上げます。

本會創立の趣旨は、國民思想の健全を期する爲に、思想問題の調査と、同志の會合と、而して健全思想の發揚宣傳に努めやうとするのであります、此種の研究と思想運動が、我國の現状に於て如何に緊要であるかは、今更申述ぶるを要しないことと存じます。

孟子が「其心につつて其事に害あり、其事につつて其政に害あり、聖人復起るも我言を易へず」と言ひしは、政治問題、社會問題よりも、思想の健全を期するが前提であると絶叫したことと存じます。釋尊

は「斷當の二見に執して國政治まることは、此の處りあること無し」と説かれ、日蓮聖人が「法は體世間は影なり、體曲れば影斜なり」と言ひしも、思想の基準が極めて大切なる所以を喝破せられたことと存じます。

此等千古の達人が大知見よりして、人生社會の根本原則を教へられしは、之が眞の社會科學の根本命題であると思ひます。 マルクス主義に對するベルンシュタインの批判を見ますと、

マルクス主義の基礎に於ける最重要の要素、言はゞ全體系を貫徹せる根本法則とも稱すべきものは、唯物史觀と云ふ名稱を有する彼獨特の歴史學說であることは、何人も異論の無い所であらう、マルクス主義は原理上唯物史觀と共に成立し、共に倒壊するものであり、而して其史觀に制限を受くる場合には、其程度に従つて、爾餘の要素の地位も共々影響を蒙るのである、故に彼の主義の當否に關する如何なる研究も、先づ此の歴史學說が妥當性を有するか如何か、或は有するとせば、如何なる程度まで然るか云ふ問題から、出發しなければならぬのである。

と云ふて居ります。又 物質的諸勢力と精神的諸勢力との交互作用に、何

等の顧慮を拂ふことなくして、或は然らずとするも、僅かに拂ふに過ぎずして、爲されし場合にはそれが該學説の創始者自身に依つて爲さるゝと、他の人々に依つて爲さるゝを問はず、總て右に從つて適當に訂正せらるべきである、と云ひ、又階級闘争説は唯物史觀の基礎の上に存立するものである、と云ひ、又先進諸國に於ては何處に於ても、吾人は階級闘争がより緩和なる形式を採るを見る、而してそうでないとするならば、將來に於ける見込は甚だ少なきものとなるであらう、と云ふて居ります。又マルクスは宗教反對の思想と階級闘争の状況からして、唯物史觀を立つるに至れり、と云ひ、又分配問題は第二である、第一は生産發展の問題である、組織問題や分配問題は從屬的關係に立つて居るからである。と云ふて居る。斯くの如くであればベルンシュタインの言に依るも、唯物史觀は訂正せらるべきであり、階級闘争は緩和であるべきであり、分配や組織よりも生産發展が前提である。と云ふれば、マルキンズムは其れ自體に於て既に大いに反省を要することと思ふ。我々の見解よりすれば、更に考察の異なる所が多々

- 臺灣檜材  
一、耐久防腐  
二、蟻害絶無  
三、香氣清楚  
四、木質堅韌  
五、理整於木  
六、木高難包

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第早上仕候

(充分なる水蓄乾燥ならしたる檜材最も優良なるも水蓄不十分なる檜材は干割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神 奈 川 縣 鶴 見 町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福 岡 市 外 堅 箱 町 馬 出 松 原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大 阪 市 西 區 市 岡 町 七 十 九 番 地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話百三三三四番)

あるのであります、其の所見の大體は本會の趣意書に記載せられてあります、其要點を申上ますれば、根本方針としては、文化理想を是正し、近世文明の偏調に對して大反省を促し、國家的懺悔を行ひ、文化創造の大方針を明掲して、其向ふ所を知らしめ、此大理想大方針の下に、東洋文化の特色を守持し、神佛三教の長所を發揮し、其調和を鞏固にし、西洋文化の長短を批判して、其取舍を誤ること無く、精神界物質界に横はれる流弊を一掃すべし、之に次で政治界の弊害を革正し、教育の根本的大改善を斷行し、宗教の應用に關しても亦刷新を敢行し社會教化と社會政策の上に、畫時代的大計畫を立て、富豪貴族には有効の法方を講じて其反省を求め、無産者には輕舉誘惑に乗せらるゝを戒め、知見と修養とに努めしめ、國民相互に協心戮力し、區々たる地位職業の差別を問はず、舉國一致國民總動員の下に此大事業を完成すべし。

此の趣意に基きまして、研究を逐げ運動を起し、力に應じて實行致したいと存じます、事は重大であり、力は微弱であります、唯だ一片の志に頼つて、この會を創立致したのであります、御賛同を得ましたる各位の御援助の下に努力精進致す覚悟であり、何卒此上とも切に御助成の程を御願申上げ置きます。

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料五厘
一年	金貳圓貳拾錢	送料五厘

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

昭和三年八月廿四日印刷納本 (第四百三號) 昭和三年十月一日發行

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

編輯人 小林順義

發行人 鈴木日雄

印刷所 東京府在原郡品川町南品川四百一十一番地

印刷所 都 都 都 印刷所

電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所

振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ



次 目

宗教撰擇の基準	本	多	日	生
立正大師の功勳	本	多	日	生
日什大正師略傳	竹	内	日	照
聖訓摘要	本	多	日	生
知法思國會第二回懇談會				
教報				